

## 伊勢物語と伊勢物語歌の理解

——新古今集・新勅撰集における作者の問題——

鈴木 隆 司

### 一 はじめに

伊勢物語と新古今集・新勅撰集の共通歌のうち、伊勢物語の「男」の歌でありながら、新古今集・新勅撰集では「よみ人知らず」として収録された歌があることは、これまでも繰り返し述べられ、「よみ人知らず」とされる理由についても様々な説が提出されてきた。このことは単に集の作者表記の問題であるにとどまらず、定家をはじめとする当時の知識人たちが伊勢物語をどのように理解していたかという問題とも関連し得ることである。これほど多くの歌について伊勢物語の当時の理解のあり方を示唆するものは新古今集・新勅撰集以外にはなく、伊勢物語の享受史を考える上でも重要な問題の一つであると言える。

伊勢物語の「男」の歌が「よみ人知らず」とされる理

由については、これまで伊勢物語のすべての章段が業平の実録として読まれたか否かという点を中心に諸説が展開されてきた。これに対して、筆者は前に「伊勢物語享受の側面——新古今集・新勅撰集の伊勢物語歌——」（以下、「前稿」と略す）において、物語が実録と読まれるか否かということ、歌が実作と考えられるか否かということは区別の必要な問題であり、いくつかの歌については、物語が業平の実録として読まれても、歌は業平が古歌など他人の歌を借用して実作ではない歌を詠出したものとして理解された可能性もあり得ることを考えた。本稿においては、前稿において紙幅の都合もあり触れることのできなかつた、作者表記に問題のある十二首（「男」の歌で「よみ人知らず」とされる歌十首、その他の問題のある歌二首）の一首ごとの問題について、検討を加えていきたい。

なお、伊勢物語の「女」の歌については、そのほとん

どが「よみ人知らず」として収録されており、「女」の歌を「よみ人知らず」とするのは一応問題がなさそうであるが、「女」の歌であるということだけで「よみ人知らず」とされているのか、疑問の残る歌もある。ただ、いたずらに問題を煩雑にすることを避けるため、本稿においては「女」の歌で「よみ人知らず」とされる歌については、考察の対象から外しておくことにする。

## 二 「よみ人知らず」の理由

伊勢物語の「男」の歌を「よみ人知らず」として収録する理由について、これまで論じられてきた説の中には、必ずしも直接的な理由の説明になっていないもの、論理的に矛盾が生じるものも含まれているように思われる。一首ごとの歌の考察に入る前に、「よみ人知らず」とされることについて、何が理由となり得るのか、何が理由とはなり得ないのかを整理しておきたい。これまでに「よみ人知らず」になる理由とされた説をまとめると、次の九つが挙げられる。

①伊勢物語の歌であることが気づかれず、他の出典から収録された。

②万葉集の歌、古今集の「よみ人知らず」の歌などに類歌がある。

③その歌を含む章段に、業平の歌ではない歌が含まれている。

④業平集など、伊勢物語以外の資料を参考として、業平の歌か否かが決められた。

⑤伊勢物語では「男」の歌であるが、女歌に見立てるなど、伊勢物語から独立して享受した。

⑥伊勢物語の本文解釈の上で、歌の詠み手が「男」ではないものと考えられた。

⑦その歌を含む章段が業平の実録ではないと考えられた。

⑧他の章段との関係の上で、業平の歌ではないと考えられた。

⑨物語は業平の実録であっても、歌は他人の歌の借用であり、業平の実作歌ではないと考えられた。

①については、前稿においても触れたように、当時の伊勢物語への嗜好、また定家が生涯にわたって繰り返し伊勢物語を書写している点などから考えれば、単純な見落としてはやはり考えにくい。これ以外に説明のしようがなく、見落とすことに何らかの蓋然性があるような場合を除いては、「よみ人知らず」となる理由として積極的

には考えにくい。また、伊勢物語に歌があることを知りながら、伊勢物語以外の資料を直接の出典にしたという考え方もあるが、その場合には、伊勢物語がどのような理解され、なぜ他の出典の方が重く見られたのかという点について別の説明が必要になり、直接的な理由とはなり得ないであろう。

②の、類歌の存在によって「よみ人知らず」となる理由を説明する説は、これまでも数多いが、疑問になる点が二つある。一つは、吉海直人氏<sup>二</sup>が「それでは真名序に記された『万葉の中より抽き、さらに七代の集の外より拾ふ』という新古今集の編纂方針に反してしまう」と述べておられるように、類歌が古今集の歌である場合には、勅撰集同士の重出をどう説明するかという問題が残ってしまうことである。もう一つは、同じく古今集の「よみ人知らず」の歌に類歌がありながら、「おもふには」（新古今一五一）の歌は「業平」の歌とされ、「わするらむと」（新古今一三六二）の歌は「よみ人知らず」とされるように<sup>三</sup>、ただ単に類歌があるだけで「よみ人知らず」とされたのかどうか、疑問が生じる例があることである。この二点の問題がある以上、類歌の存在だけで「よみ人知らず」となる理由を説明するのは難しい。類歌が存在する場合に、伊勢物語の歌が、あるいはその歌を含む章段がどのように理解されたのかということを

直接的な理由として考えておく必要があるのではないだろうか。

③については、⑦の理由と併せて考えるべきであると思われるので、章段全体をどう理解したのかという点については⑦の項で改めて考えてみたいが、そもそも章段内の他の歌との関係で「よみ人知らず」とされる理由を説明する方法が妥当であるのかどうか。そのことに疑問を感じるのは、②でも挙げた「おもふには」の歌を含む伊勢物語六五段に、古今集（六二〇）・定家八代抄（一七七八）で「よみ人知らず」とされる「いたづらにゆきてはきぬるものゆゑに見まくほしさにいざなはれつつ」の歌（この歌については伊勢物語・古今集・新古今集の間に歌句の異同がない）が「男」の歌として含まれており、業平の歌ではなさそうな歌が含まれている章段では他の歌も業平の歌ではないとされていたとすると、「おもふには」の歌の作者について、説明に窮することになるからである。③についても、直接的には「よみ人知らず」となる理由とするのは難しいように思う。

④については、業平集に収録されながら「よみ人知らず」の歌とされているものもあれば、業平集に収録されていない歌でも「業平」の歌とされている場合があり、全体的に見て業平集での歌の有無と新古今集・新勅撰集の作者表記の間に規則性は見出せない。加えて、撰者た

ちが伊勢物語以上に業平集を尊重した根拠も見出せない。ある歌について業平集での歌の有無と新古今集・新勅撰集の作者表記が一致したとしても、偶然の一致の可能性もあり、また、両者が共通する根拠によつて業平の歌とはしなかったためとも考えられ、必ずしも両者の直接的な関係を示すものにはならない。業平集によつて作者表記を定めたとするのは、やはり根拠に乏しいことであると考えられる。

⑤については、前稿において検討したが、新古今集・新勅撰集の「よみ人知らず」の歌の中に、このような理由で撰集資料の記述に反してまで「よみ人知らず」とされた歌は他に見出すことができず、撰者たちがこのような姿勢を持っていたとは考えられなかった。女の歌に見立てたとする根拠は、歌の表現が女歌らしいという点に集約されるが、何をもつて「女歌らしい」「男歌らしい」とするのかは、かなり主観的な要素も絡んでしまい、新古今集・新勅撰集の作者表記に合わせて何とでも言えてしまう危険性があるし、撰者たちがそのような撰集姿勢を持っていたことの証拠も必要になる。また、伊勢物語一〇七段には、「男」が女の代作をして歌を詠むような例（古今集には業平の歌として収録）もある。伊勢物語のみならず、たとえば和泉式部日記にも、「女」が親王の代作をして男歌を詠んでいる例も見出せる。男が女の

代作をしたり、女が男の代作をするような例は、他にも私家集などには数多く見出すことができ、さほど特別なことではなかったようである。歌の表現と実作者の性別は必ずしも一致させて考えられていたわけでもないであろう。そのような状況の下で、果たして女歌のようだから業平の歌ではないとするような判断基準があったのかどうか、そのような例が新古今集・新勅撰集から他には見出せない以上、やはり疑問と考えざるを得ない。

⑥については、伊勢物語二六段の「おもほえず」の歌（新古今一三五八）のように、伊勢物語での歌の詠み手が「男」以外の人物と読まれる可能性のある歌について、これまでにも「よみ人知らず」となる理由に挙げられてきた。伊勢物語において「男」の詠ではない、あるいは、少なくとも「男」の詠であるのかどうかわからないと判断された歌が「よみ人知らず」となるのは自然なことである。伊勢物語の本文からそのような判断が可能である場合には、⑥を「よみ人知らず」となる理由と考えておいてよいであろう。

⑦についても、前稿において検討を加えた。②で述べた「おもふには」の歌と「わするらむと」の歌の差、また③において述べた伊勢物語六五段の問題は、実録ではないということでは解消されない問題であり、「よみ人知らず」の歌を実録ではないと考えられた章段の歌と即

断することはできない。但し、周知の通り、定家はいわゆる根源本の奥書において、伊勢物語を業平の自筆とする説を引きながら、史実では業平没後の出来事となる「芹川行幸」の記事が記されていることなどから、業平自筆説に対しては慎重な姿勢を示している。これはもちろん、伊勢物語が業平の作であるかどうかについての記述であり、実録云々についての記述ではないが、業平没後の出来事というように明らかに業平の実録と考えると矛盾の生じる章段の歌については、⑦を「よみ人知らず」となる理由と考える余地はある。とはいえ、定家が作者に用いている説を述べる際に「在原中将自記」という表現を用いていることから、基本的には伊勢物語を業平の実録と理解していたようであり、まずは他の可能性を考えてみるべきであろう。それでも説明がつかない場合に、問題となる歌を含む章段から、実録ではないと判断され得る十分な根拠が見出せるかどうかを慎重に考える必要があるのではないだろうか。

⑧については、ある章段を他の章段とのつながりを考えて読むこと自体は、伊勢物語の理解として自然なことであると考えられる。但し、③でも考えたように、同一章段の中でも業平の歌と考えられる歌とそうではない歌が混在することがあることを考えれば、このこと自体が直接に「よみ人知らず」とされる直接の理由となるわけ

ではない。その章段群についてどのように理解されたかという点が問題となる。この点については、これまでに次のような先学諸氏の説がある。

a（一二段から一二二段について）本来定家本に含まれていない、後の増補附加の章段であると考えられた<sup>(110)</sup>。

b（一〇九段以降について）業平以外の詠歌による業平の物語から外れた章段と考えられた<sup>(111)</sup>。

c 古今集の業平歌の章段と繋がり弱い章段については業平歌らしくない章段と考えられた<sup>(112)</sup>。

まず、a について問題になるのは、増補附加の章段の歌であれば、伊勢物語の出典としての信頼性がなくなるのかどうかという点である。新古今集では、伝為家筆本の巻末附加章段に見られる（他に出典と考えられる資料は現存する限りでは見出せない）一四一〇「むめの花」の歌が「業平」の歌として、一七二〇「夢かとも」の歌が「惟喬親王」の歌として収録されている。これら二首に関しては、定家本に含まれていないにもかかわらず、伊勢物語の記述が信頼されていることになる。また、そもそも撰者たちに伊勢物語が増補を経たものとする考えがあったのか、根源本の定家奥書が作者を業平か伊勢かといった択一的な書き方をしていることに照らしても疑問であるし、仮に増補を考えていたとしても、増補された

章段だから業平の実録ではないと理解されたことにはならない。中世に流行する「業平作・伊勢補筆」説も、伊勢が業平の妻であつたという伝承が前提になっている。増補された章段としても、それは業平をよく知る人物によつて書かれた業平の実録と理解される可能性が高いものと考えられ、増補かどうかという問題と業平の歌かどうかという問題は直接には結びつかない。

bについては、「業平以外の詠歌」が誰の詠歌であるのが問題となる。生澤氏が示された、一〇九段から一六段までの歌は、古今集・後撰集の紀望行・在原元方・在原行平・小野小町、および「よみ人知らず」の歌であるが、これらの歌があるからといって、業平と無関係の章段と判断されるのかどうか、この点に問題がある。

業平の兄である行平はもちろんのこと、当時においては小町も二五段によつて業平との関係が考えられていたはずあり、ともに伊勢物語の他の章段にも登場する人物である。一一五段は陸奥の国に住む男と女の話であるが、古今集（一一〇四）の小町の歌「おきのあて身をやくよりもかなしきは宮こしまべのわかれなりけり」を「女」が「男」に詠み贈つたと物語にあるのだから、「女」は小町、「男」は業平と読まれていた可能性も考えておかなければならない<sup>(2)</sup>。業平以外の詠歌によつて作られているからといって、それが必ずしも業平と無関係な章

段と理解されたということにはならないのではないだろうか。

cについては、古今集の業平歌とつながりの弱い章段は業平歌らしくない章段とするような判断が当時の撰者たちにあつたのかどうか、また「らしい」「らしくない」ということで勅撰集の作者表記を決めていたのかどうか、まずこの点に疑問がある。さらに、つながりが強いかわ弱いかはかなり主観的な判断に拠ることもあり、これも新古今集・新勅撰集の作者表記に合わせる形で何とも言えてしまう危険性がある。

結局のところ、いくつかの章段をまとめた章段群の形で捉えることは認められても、これだけでは「よみ人知らず」の直接の理由にはならず、その上で他の合理的な理由を探さなければならない。

⑨は前稿において提出した説であり、歌句を一部変えて他人の歌を借用したと理解された場合、歌句が異なる以上もとの歌とは一応別の歌とされながら、オリジナルの歌とも考えられなかったために、借用した詠み手を作者として記すことができなかったものと考えた。このように考えると②③で存在したような矛盾も解消される。

ただ、すべての「よみ人知らず」の歌がこの理由で説明できると考えているわけではなく、その適用の条件も含めて、本稿において検討していきたい。

以上の検討によれば、伊勢物語の「男」の歌でありながら、新古今集・新勅撰集で「よみ人知らず」として収録される直接の理由としては、⑥「伊勢物語の本文理解の問題」（以下〈理由⑥〉と略す）、⑦「物語が業平の実録ではない」（以下〈理由⑦〉と略す）、⑨「歌の実作者が業平ではない」（以下〈理由⑨〉と略す）の三点が考えられ、場合によっては①「単なる見落とし」（以下〈理由①〉と略す）も考えなければならないことになる。以下、問題となる歌について、一首ごとに検討を加えていきたい。

### 三 新古今集の問題歌

伊勢物語と新古今集の共通歌のうち、作者についての問題があるのは次の六首である（なお、すべて「題知らず」である）。

・ 一〇四〇

風ふけばとはになみこすいそなれやわがころもでの  
かわく時なき

・ 一三五八

おもほえず袖にみなとのさわやかなもろこし舟のよ

りしばかりに

・ 一三六二

わするらむとおもふ心のうたがひにありしよりけに  
物ぞかなしき

・ 一三六六

今までにわすれぬ人はよにもあらじおのがさまざま  
としのへぬれば

・ 一三六八

やましろのゐでのたま水てにくみてたのみしかひも  
なきよなりけり

・ 一五九〇

あしのやのなだのしほやきいとまなみつげのをぐし  
もささずきにけり

このうち一三五八「おもほえず」一三六六「今までに」の二首については、出典と考えられる伊勢物語二六段、八六段から、歌の詠み手が必ずしも「男」に限定できないことがこれまでも指摘されている<sup>（七）</sup>。撰者たちが詠み手を「男」ではない、あるいは「男」であるかどうかかわからない、と判断したのであれば、「よみ人知らず」とされるのは当然のことであろうし、この二首に関しては、他に「よみ人知らず」とされる理由が伊勢物語の本文やこの歌に関わる現存する資料からは見出せない。こ

の二首については、先学諸氏の説に従い、残る四首について検討していきたい。

一〇四〇「風ふけば」の歌は、新古今集では「貫之」の歌、伊勢物語（一〇八段）では第三句を「いはなれや」とする「女」の歌である。また、貫之集にも第二句を「たえず浪こす」とする形で収録されている。貫之集からの収録であることは間違いないであろうが、その場合、伊勢物語はどのように扱われたのが問題である。

一三六二「わするらむと」の歌は、新古今集では「よみ人知らず」、伊勢物語（二一段）では「男」の歌である。また、古今集（七二八）では第三句を「つくからに」第五句を「まづそこひしき」とする類歌が「よみ人知らず」の歌として収録されている。

一三六八「やましろの」の歌も、新古今集では「よみ人知らず」、伊勢物語（一二二段）では第三句を「てにむすび」とする「男」の歌である。古今六帖（三一二五）では第四句を「たのめしかひも」とする形で収録されている。

一五九〇「あしのやの」の歌は、前の二首とは逆に、伊勢物語（八七段）では「昔の歌」とありながら、新古今集で「業平」の歌として収録されていることがこれまでに問題にされている。古今六帖（三一八〇）に新古今

集・伊勢物語と同じ形で作者が表記されずに収録されている他、万葉集（二七八）で石川少郎の歌とされる「然之海人者しかのあまは 軍布めかり 苧塩しほ 焼やき 無い 暇まな 髪梳くしげ 乃小櫛のこくし 取毛とりも 不見みなく 久尔くに」が類歌として指摘されている。

まず、伊勢物語の「男」の歌でありながら、「よみ人知らず」とされる二首について考えたみたい。

一三六二「わするらむと」の歌については、前稿において、新古今集一一五一「おもふにはしのぶることぞまけにけるあふにしかへばさもあらばあれ」の歌との比較において考察した。いずれも古今集の「よみ人知らず」の歌を類歌として持ちながら、新古今集において一方が「よみ人知らず」、他方が「業平」の歌とされるのは、時代の先後関係から、「おもふには」の歌については延喜帝による業平の歌の借用、「わするらむと」の歌については業平による古歌の借用と理解されたため、と考えることができた（<sup>八</sup>）。伊勢物語と新古今集の共通歌の中では他にも、新古今集九〇四「するがなるうつの山辺のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり」は伊勢物語（九段）との間に歌句の異同がなく、作者も「業平」とするが、忠岑集に第四、五句「ゆめにもひとをみてややみなむ」とする類歌がある。忠岑が業平の歌を借用することはできても、業平が忠岑の歌を借用することはできない

から、この歌についても「おもふには」の歌と同じく、業平の歌が借用とされた、と理解された可能性がある。また、新古今集一三七八「あしべよりみちくるしほのいやましにおもふかきみがわすれかねつる」は作者を「山口女王」とするが、伊勢物語（三三段）では第四、五句を「君に心を思ひますかな」とする「男」の歌である。万葉集（六一七）では「從廬辺 あしべより 満来塩乃 みちくるしほの 弥益荷 いやましに 念歎君之 おもふかきみが 忘金鶴 わすれかねつる」、作者を「山口女王」としており、新古今集の直接の出典と考えられる。では、伊勢物語についてはどのように理解されたのであろうか。伊勢物語三三段には、

むかし、男、津の国、菟原の郡に通ひける女、このたびいきては、または来じと思へるけしきなれば、男、

あしべより満ちくるしほのいやましに君に心を思ひますかな  
返し、

こもり江に思ふ心をいかでかは舟さす棹のさしてしるべき

ゐなか人の言にては、よしやあしや。

とある。物語の本文からは、詠み手が「男」ではないとは考えられないし、実録でないことを積極的に考えるべき根拠も見出せない。それどころか、この章段は新古今

集で「業平」の歌とされる一五九〇「あしのやの」の歌を含む八七段と同じく、「津の国、菟原の郡」が舞台であり、八七段と結びつけられて業平の実録と考えられていた可能性が高い。残る可能性としては（理由⑨）、すなわち、業平が万葉集の山口女王の歌を借用したものとして理解されていた可能性が考えられる。

以上、四首の歌について、新古今集と伊勢物語の歌句の異同（「歌」の欄）、他出資料とその資料における歌の詠者及び新古今集との歌句の異同（「他出」の欄）、新古今集での作者（「作者」の欄）を一覧にまとめると次のようになる（なお、「歌」と「他出」の欄の○、×は、新古今集との歌句の一致、不一致を示す）。

| 歌番号  | 歌 | 他出             | 作者   |
|------|---|----------------|------|
| 九〇四  | ○ | 忠岑集（忠岑）<br>×   | 業平   |
| 一一一  | ○ | 古今集（読人不知）<br>× | 業平   |
| 一三六二 | ○ | 延喜御集（延喜帝）<br>× |      |
| 一三七八 | × | 古今集（読人不知）<br>× | 読人不知 |
|      |   | 万葉集（山口女王）<br>○ | 山口女王 |

サンプル数が少ないので決定的なことは言いにくいだが、類歌が絡んだときの新古今集の処理について仮にまとめ

ておくと、次の三点が考えられる。

・ 類歌の存在が考えられるときは、時代の先後など客観的根拠によつて実作者が決定される。

・ もとの歌をそのまま収録するときは、当然その歌の実作者が作者とされる。

・ もとの歌を改作した借用歌を収録するときは、「よみ人知らず」とされる。

このことは、右のような伊勢物語関係の歌だけに見られる特殊なものというわけでもない。一例を挙げておくと、新古今集八五〇「あるはなきはかずそふ世中にははれいづれの日までなげかん」の歌は、新古今集では「題知らず」、作者を「小野小町」とする。小町集にも収録されており、問題はなさそうであるが、栄花物語（巻第四）には、

世の中のあはれにはかなきことを、摂津守為頼朝臣といふ人、

世の中にあらましかばと思ふ人なきは多くもなり  
にけるかな

これを聞きて、東宮の女蔵人小大君、返し、

あるはなきは数そふ世の中にあはれいつまで  
あらんとすらん

とぞ。

とあり、第四、五句が異なる形で「小大君」によつても

詠まれている。新古今集の時代に、栄花物語の記事が実録ではないものとして読まれたとは考えにくく、この歌についても、時代の古い小町が実作者とされ、小大君による小町の歌の借用と理解されていた可能性が考えられる。

一三六二「わするらむと」が「よみ人知らず」として収録されている理由は、やはり（理由⑨）、業平による古歌の借用と理解されていたものとしておくのが最も合理的であろう。

次に、一三六八「やましろの」の歌について考えてみたい。まず、この歌を含む伊勢物語一二二段の本文を挙げておくと、

昔、男、ちぎれることあやまれる人に、

山城の井手の玉水手にむすびたのみしかひもなき  
世なりけり

と言ひやれど、いらへもせず。

とある。この歌についても、物語の記述から、やはり「男」の詠歌としか考えられないし、実録ではないことを積極的に考えられる根拠を見出すこともできない。また、古今六帖は作者を表記しない形で収録しているが、古今六帖で作者を記さない歌を新古今集が作者明記で収録することは、伊勢物語関係の歌も含めて新古今集には

他にいくつも例があり、撰者たちが伊勢物語以上に古今六帖を重視して作者表記を決めたとは考えにくい。

この他に出典と考えることのできる資料を他には見出せないが、一つだけ気になる資料がある。この歌について、袖中抄には、

一、ゐでのたまみづ

やましろのゐでの玉水てにくみてたのみしかひもなきよなりけり

顕昭云、是は伊勢物語云、昔をとこちぎれる事あやまれる人に、此歌をやれりけれど、いらへせずとあり。ゐでの玉水とは、山城よりならへゆく道にゐでの清水とて、めでたき水のみちづらにある也。往來の人は手をむすびつゝのむ。此水をば玉の井と云。其をゐでの玉水とはいふ歟。たのみしとは手に掬てのむと云事を、人をたのむ心によせて読るなるべし。今案云、此歌はゐでにてちぎれる事を誰かかたりける事の有けるにや。若大和物語に書きたるは是にや。昔内舍人に有ける人……（以下、大和物語一九段の引用）

とあり、大和物語一九九段の最後にこの「やましろの」の歌が省略されているのではないかとする説を述べている。大和物語一九九段は、

むかし、内舍人なりける人、おほうわの御幣使に大

和の国に下りけり。井手といふわたりに、清げなる人の家より、女どもわらはべいで来て、このいく人を見る。きたなげなき女、いとをかしげなる子を抱きて、門のもとに立てり。この児の顔のいとをかしげなりければ、目をとどめて、「その子、こち率て来」といひければ、この女寄り来たり。近くて見るに、いとをかしげなりければ、「ゆめ、こと男し給ふな。われにあひ給へ。おほきになりたまはむほどにまゐり来む」といひて、「これをかたみにしたまへ」とて、帯をときてとらせけり。さて、この子のしたりける帯をときてとりて、もたりける文にひき結びてもたせていぬ。この子、とし六、七ばかりありけり。この男、色好みなりける人なれば、いふになむありける。これをこの子は忘れず思ひもたりけり。男ははやう忘れにけり。かくて七、八年ばかりありて、また、おなじ使にさされて大和へいくとて、井手のわたりに宿りゐて見れば、前に井なむありける。それに水くむ女どもあるがいふやう、

とある切斷形式の章段であり、「水くむ女」が詠んだ歌が記されていない。袖中抄のように、「水くむ女」が詠んだ歌が「やましろの」の歌であったと考ええると、伊勢物語・大和物語はそれぞれのように理解されることになるのだろうか。伊勢物語・大和物語のそれぞれの本文

から、実録ではないとする根拠は見出せない。どちらも実録と考えられたとすると、理解の可能性が二つある。

・伊勢物語の「男」と大和物語の「内舍人」は同一人物であり、同じ出来事を描いている

・一方の物語が先行し、他方が歌を借用した。

歌の詠み手が伊勢物語では「男」、大和物語では「女」となっており、また、登場人物を実名表記している大和物語が業平を意図して「内舍人」と記すとは考えにくい<sup>(九)</sup>から、前者の可能性は低いと考えておいてよいであろう。後者については、「水くむ女」の実作、業平の借用、「業平の実作」「水くむ女」の借用の両方の可能性を考えなければならないが、物語の舞台が「井手といふあたり」である大和物語では「やましろのみでの……」と詠む必然性があるのに対して、伊勢物語ではその必然性がない。すると、伊勢物語の「男」の歌は実作ではなく、自らが約束を違えた場面で、よく似た状況の下で詠まれた「やましろのみでの玉水」の歌を借用した、と理解された可能性が出てくる。

このように理解されていたとすると、新古今集で「よみ人知らず」とされるのは、この歌についても(理由⑨)、業平による古歌の借用と理解されていたためということになる。もちろん、新古今集の撰者たちが、大和物語に省略された歌が「やましろの」の歌であると頭から信じ

ていたかどうかはわからないが、当時そのような説があったのであれば、少なくともこの歌を業平の実作と断定することができず、「よみ人知らず」としたのではないだろうか。

残る二首は「よみ人知らず」ではなく作者明記の歌であり、ここまでとは別の問題になる。

一〇四〇「風ふけば」の歌が新古今集で「貫之」の歌とされるのは、現在では伊勢物語の一〇八段が貫之時代以後に貫之の歌を利用して増補されたものと考えらることで簡単に解決できる。但し、これは、伊勢物語が段階的に成立したとする知識が前提となるものであり、新古今集の撰者たちが現代の研究者と同じレベルでこのことを理解していたとは考えられない。この歌の作者の問題について合理的に説明する手段を筆者は持たないが、前稿においては、撰者名注記から、この歌が家隆単独の撰であることを問題とし、出典と考えられる資料から作者が明らかであるにもかかわらず「よみ人知らず」とされる歌四首がすべて家隆単独の撰と考えられることから、撰者家隆のミスである可能性が高いことを考えた。やはり、これ以外に説明の付けようがないようである。(理由①)に準じて、伊勢物語を見ていなかったものと考えておきたい。

一五九〇「あしのやの」の歌については、伊勢物語八七段の冒頭に、

むかし、男、津の国、菟原の郡、蘆屋の里にしろよしして、いきてすみけり。昔の歌に、

蘆の屋のなだのしほ焼きいとまなみつけの小櫛もささず来にけり

とよみけるぞ、この里をよみける。ここをなむ蘆屋の灘とはいひける。

とある。「昔の歌」とあつて業平の歌ではなさそうな書き方がされているが、新古今集では「業平」の歌として収録されており、「よみ人知らず」の問題とはちょうど裏返しの問題として考えられている。これまでに、この歌が雅平本業平集に、

つにくにむばらのこほりあしやのさにて

あしのやのなだのしほやきいとまなみつけのをぐし  
もささできにけり

とあり、この記述に即して業平の歌と考えられたため、と説明されてきた<sup>二〇〇</sup>。この雅平本重視の説に問題があるとすれば二点、まず第一に、伊勢物語以上に業平集が重視された例がこの一首以外に見出せず、なぜこの歌に限って雅平本の記述が重視されたのかわからないことである。たとえば、前に挙げた一三六六「今までに」の

歌は、雅平本のみならず、すべての系統の業平集に収録されており、詞書の内容などからすればどれに従つても「業平」の歌となつてよいはずであるのに、「よみ人知らず」とされている。第二に、そもそもなぜ雅平本がこの歌を収録したのかわからないことである。「昔の歌」という表現で業平の歌ではないと判断されるのであれば、雅平本の編者もこの歌を収録しなかつたはずである。もちろん、雅平本は伊勢物語初段の「みちのくのしのぶもちずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに」の歌を業平に対する返歌として収録しているから、この例に準じて誤りと考えられなくもないが、実証しようのない誤りを前提として考えるよりも他の可能性を考えてみる必要があるであらう。

第二の疑問は何とも言い難い部分もあるが、やはり第一の疑問が大きく、単純に雅平本重視の説を採ることはできない。疑問の解決として、まず考えられるのが、新古今集・雅平本業平集の出典となつた伊勢物語の本文の問題である。出典となつた伊勢物語に「昔の歌」という表現がなく、「男」の歌であるかのように書かれていたとすれば、二つの疑問は一気に解決する。しかし、そのような本文の存在は現在確認できず、結局のところ、その可能性がないとも言えない、というレベルの話になつてしまう。

ところで、「昔の歌」について、現代の我々は万葉集「然之海人者」の歌を踏まえたものと考えており、現代の主要な伊勢物語の注釈書も「昔の歌」について、漏らさずこの歌を類歌として指摘している。では、新古今集の撰者たちはどうであつたのであろうか。新勅撰集（一三三七）には「しかのあまのめかりしほやきいとまなみくしげのをくしとりも見なくに」（題知らず、よみ人知らず）と万葉集にほぼ一致する形で歌がとられており、「あしのやの」の歌と「然之海人者」の歌は、定家の認識としては別の歌であつたことになる。加えて、伊勢物語の本文から考えても、「然之海人者」の歌であれば、「この里をよみける」ことにはならないのであるから、「昔の歌」Ⅱ「然之海人者」の歌、という認識がされていたわけではないであらう。

では、「昔の歌」はどのように認識されていたのであろうか。この点について、林克則氏は「むかしのうた」を業平がかつて詠んだ歌と解することがあつたのではないかと指摘されている<sup>二二</sup>。伊勢物語における「昔」の用例を検討してみると、全部で百三十四例、章段冒頭の百二十四例以外には歌に四例、物語本文に六例（八七段「昔の歌」の例を含む）ある。このうち、物語本文の例を列挙すると、次のようになる。

昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。（初

段）

貧しく経ても、なほ、昔よかりし時の心ながら、世の常のこともしらず。（一六段）

昔の若人はさるすける物思ひをなむしける。今の翁、まさにしなむや。（四〇段）

昔仕うまつりし人、俗なる、禪師なる、あまた参り集まりて、正月なればことだつとて、大御酒たまひけり。（八五段）

昔もかかることは、世のことわりにやありけむ。（九三段）

これらのうち、「昔……し」の形になっている二例（一六段、八五段）は物語場面以前を指していることになるが、物語と無関係な過去を指しているわけではない。それ以外の三例はすべて章段の冒頭に設定された「昔」と同じ時代を指していることになる。また、和歌の用例は、たとえば「春や昔の春ならぬ」（四段）「昔より心は君によりにしものを」（二四段）というように、これも物語と無関係な過去を指してはいない。和歌の用例も含めて九例の中に、「昔」が「物語とは無関係な昔」「業平の時代よりも昔」を指しているものは一例もないことになり、伊勢物語の「昔」の用例だけに即して考えれば、「昔の歌」を「業平以前の歌」として理解しなければならぬ必然性はないことになる。新古今集の撰者たちの

八七段冒頭についての解釈が、

昔、男は、津の国、菟原の郡、蘆屋の里に領地を持つていた縁で、その地に行つて住んでいた。その当時の歌に「蘆の屋の……」と詠んだのは、（男が）この里を詠んだのである。

というものであつたならば、一五九〇「あしのやの」の歌は、伊勢物語の「男」の歌を「業平」の歌として収録しているということであり、作者表記についての問題はないことになる。

ただ、ここで一つ問題として残るのは、「あしのやの」の歌と「然之海人者」の歌の関係である。この二首が類歌と考えられたとすると、前に見た一三六二の例のように、業平による古歌の借用と理解され、「よみ人知らず」とされる可能性を考えなければならぬからである。しかし、「あしのやの」の歌と「然之海人者」の歌は、内容上の一致は見られても、歌句そのものはあまり一致していない。一句が完全に一致するのは第三句「いとまなみ」のみであり、語句の一致もこの他「しほ焼き」「小櫛」の二語のみであるから、一三六二などの例と同じレベルで類歌と理解されたわけではないのかもしれない。「あしのやの」の歌については単なる借用歌ではなく、創作性を認めたのではないだろうか。

以上によれば、この歌についての作者の問題は（理由

⑥に準じた形で、伊勢物語の本文理解の上での問題、と考えておくのが、雅平本重視の説、あるいは新古今集の撰者たちの単純なミスと考えるよりも合理的なようである。

以上、伊勢物語と新古今集の共通歌のうち作者に問題のある歌について、作者が一見伊勢物語と矛盾したものになる理由については、次のように考えられる。

・一〇四〇（理由①）撰者家隆による伊勢物語の見落とし。

・一三五八（理由⑥）歌の詠み手が「男」ではない、もしくは「男」と断定できないものと考えられた。

・一三六二（理由⑨）古今集よみ人知らず歌の借用と理解された。

・一三六六（理由⑥）歌の詠み手が「男」ではない、もしくは「男」と断定できないものと考えられた。

・一三六八（理由⑨）大和物語一六九段の省略歌の借用と理解された。もしくはそのような説があつたため業平の歌と断定できないものと考えられた。

・一五九〇（理由⑥）「昔の歌」を「（男が）蘆屋の里に住んでいた当時の歌」と理解された。

#### 四 新勅撰集の問題歌

伊勢物語と新勅撰集の共通歌のうち、作者についての問題があるのは次の六首である（なお、この六首もすべて「題知らず」である）。

・六二九

いにしへはありもやしけむいまぞしるまだ見ぬひと  
をこふるものとは

・七二〇

こひわびぬあまのかるもにやどるてふ我から身を  
くだきつるかな

・九四八

たまのををあわをによりてむすべればたえてののち  
もあはむとぞ思ふ

・九四九

あふことはたまのをばかりおもほえてつらきこころ  
のながくもあるかな

・九五〇

ひとはいさおもひやすらむたまかづらおもかげにの  
みいとど見えつつ

・九五一

ながからぬいのちのほどにわするるはいかにみじか  
き心なるらむ

これら六首はすべて、伊勢物語の「男」の歌でありながら、新勅撰集で「よみ人知らず」とされている歌である。

六二九「いにしへは」の歌は、新勅撰集と伊勢物語（一一一段）の間に歌句の異同はなく、他に出典と考えられるものも見出せない。

七二〇「こひわびぬ」の歌も、新勅撰集と伊勢物語（五七段）の間に歌句の異同はなく、他に出典と考えられるものも見出せない。

九四八「たまのをを」の歌も、新勅撰集と伊勢物語（三五段）の間に歌句の異同はないが、万葉集（七六三）に「玉緒たまの緒乎を沫緒あわ二をによりて搓ひすべ而ち結むす有べ者ち在ありてのち手じ後も二も毛も不相あは在目は八方むつぱう」とする紀女郎の歌があり、古今六帖（三二〇八）にも第三、四、五句を「むすべらばありてののちにもあはざらめやは」と万葉集に近い形で収録され、作者も「きの女郎」とある。

九四九「あふことは」の歌は、伊勢物語（三〇段）では第五句を「ながく見ゆらん」としており、新勅撰集と一致しないが、他に出典と考えられるものは見出せない。

九五〇「ひとはいさ」の歌は、新勅撰集と伊勢物語（二一段）の間に歌句の異同はないが、万葉集（二四九）には「人者縦ひとはいさ 念息登母おもひやむとも 玉纒たまかづら 影尔所見乍かげにみえつつ 不所忘鴨わすられぬかも」

とあり倭太后の歌である。なお、続古今集（一三九二）では万葉集と一致する形で歌を収録し、作者を「倭太后」としている。

九五「ながからぬ」の歌は、新勅撰集と伊勢物語（一三段）の間に歌句の異同はなく、他に出典と考えられるものも見出せない。

これら六首のうち、まず類歌の存在する九四八「たまのをを」、九五〇「ひとはいさ」の二首について考察してみたい。それぞれの出典と考えられる伊勢物語三五段、二一段からは、これらを業平の実録ではないと積極的に判断できる根拠は見出せず、また、歌の前後に「男」の歌とする記述はいずれもないものの、文脈上やはり「男」の歌と考えられ、〈理由⑥〉〈理由⑦〉は考えにくい。ともに万葉集の歌を古歌として見出せることからすれば、〈理由⑨〉、業平による古歌の借用と理解されたと

するのが最も可能性が高いのではないだろうか。また、新勅撰集九五三「めには見て手にはとられぬ月のうちのかつらのごときいもをいかにせむ」は作者を「湯原王」とするが、伊勢物語（七三段）では第五句を「君にぞありける」とする「男」の歌である。万葉集（六三二）では「目二破見而 手二破不所取 月内之 楓 如 妹乎奈何責」とする湯原王の歌であり、新勅撰集の直接

の出典と考えられる。この他、古今六帖（四二八八）にも第五句を「いもにもあるかな」とする形で収録されている。以上の三首を、前章と同様に整理しておく次のようになる。

| 歌番号 | 歌 | 他出                    | 作者        |
|-----|---|-----------------------|-----------|
| 九四八 | ○ | 万葉集（紀女郎）<br>古今六帖（紀女郎） | ×<br>読人不知 |
| 九五〇 | ○ | 万葉集（倭太后）              | ×<br>読人不知 |
| 九五三 | × | 万葉集（湯原王）              | ○<br>湯原王  |

これら三首の歌についても、前章で仮定した類歌の扱いに矛盾はない。いずれも業平による万葉集の歌の借用と理解されていたものと考えておいてよいであろう。

六二九「いにしへは」の歌については、出典と考えられる伊勢物語一一一段の他の二首の歌が、後撰集の在原元方の歌とそれへの返歌を逆にしたものであり、このことが原因で「よみ人知らず」とされたと考えられることがこれまでも指摘されている（三三）。後撰集の誤り、元方が業平の歌を借用したなど、いろいろな理解の可能性が考えられるが、「いにしへは」の歌の作者を「元方」

ではなく「よみ人知らず」としているのであるから、この章段の「男」が「元方」と理解されていたわけではないようである。ただ、後撰集を信用して、元方の歌が含まれるこの章段を、業平の時代ではない、業平没後の物語と理解した、あるいは、その可能性があるために業平の歌と断定することができなかった、と考えておいてよいのではないだろうか。

九五「ながからぬ」の歌については、これと関連して考えられる。出典と考えられる伊勢物語一―三段は、この章段自体に業平の実録であることを疑う記述が含まれているわけではないが、続く一―四段は定家も疑いを持っていた「芹川行幸」の章段であり、二つ前の一―四段は前述の通り、業平没後の章段と理解され得るものであった。一―一段から一―四段までの間に業平没後の物語がまとめて書かれている（あるいは、その可能性がある）と考えられたとすれば、この歌が業平の実作であることも疑わしいと考えられ、「よみ人知らず」とされたのではないだろうか。

以上二首については、「よみ人知らず」とされた直接の理由として、〈理由⑦〉を考慮しておきたい。

残る二首、七二〇「こひわびぬ」、九四九「あふことは」の二首については、出典と考えられる伊勢物語五七

段、三〇段から業平の実録ではないと考えられる根拠は見出せず、また、現存資料の限りでは類歌などの存在も確認できない。ただ、生澤喜美恵氏<sup>二二</sup>も指摘しておられるように、他の伊勢物語と新勅撰集の共通歌が「業平」の歌「よみ人知らず」の歌を問わず、すべて定家本系の伊勢物語と歌句が一致しているのに対して、九四九「あふことは」の歌だけに歌句の異同があり、この歌については伊勢物語以外の出典から収録された可能性も考えられる。その場合は、出典が伊勢物語ではないから、ではなく、直接的な理由としてはやはり〈理由⑨〉のようなことを考えなければならぬであろう。

定家の見た資料のすべてを現代の我々が見ることはできず、「よみ人知らず」とされた力キがそこにある可能性もあって、この二首については「よみ人知らず」とされた理由を現時点では保留せざるを得ない。

以上、伊勢物語の「男」の歌でありながら、新勅撰集で「よみ人知らず」とされている歌について、その理由をまとめると、次のようになる。

・六二九〈理由⑦〉後撰集元方歌により業平没後の物語と理解された。

・七二〇〈現時点では保留

・九四八〜〈理由⑨〉業平が万葉集の歌を借用したと

理解された。

・九四九（現時点では保留）

・九五〇（理由⑨）業平が万葉集の歌を借用したと理解された。

・九五一（理由⑦）業平没後の章段群と理解された。

## 五 まとめ

伊勢物語と新古今集・新勅撰集の共通歌のうち、新古今集・新勅撰集の作者表記に問題のある歌について、一首ごとにその理由を検討したところ、以上のような結果を得た。このような考察に対しては、定家をはじめとする撰者たちがどの程度厳密に作者を判断していたのか、

という立場からの反論ももちろん考えられる。だが、撰者たちがはつきりとした基準もなく行き当たりばったりに作者を判断していたとは考えにくいし、前稿においても考察したように、新古今集・新勅撰集で「よみ人知らず」とされる歌は、現存する資料で厳密に考察しても、撰者たちが本当に作者がわからずに「よみ人知らず」としたものと考えられるものばかりであった。当時の伊勢物語についての理解を正しく把握するためにも、資料的な限界があるとはいえ、できる限り合理的に作者表記の

問題について解決を求める努力をする必要があるのではないかと考えている。

本稿において考察した中でも、特に「男」の歌で「よみ人知らず」とされる十首のうち少なくとも四首が、業平が他人の歌を借用したと理解されたと考えておくことによって矛盾のない説明が可能になる点は注目できる。

これ以後、中世における伊勢物語注釈においては、万葉集や古今集の「よみ人知らず」歌であることを指摘しながら、基本的に伊勢物語が業平の実録であることを疑っていない。伊勢物語の理解を考えるにあたっては、前稿においても考えたように、やはり物語の実録性と歌の実作性を別に考えなければならないようである。

## 参考文献

片桐洋一氏『伊勢物語の研究（研究篇）』（昭和四三・二 明治書院）

田中宗作氏『伊勢物語と勅撰集の共通歌について（二）——新古今集・新勅撰集を中心として——』（『語文』三九 昭和四九・三）

神谷敏成氏『新古今集・新勅撰集と伊勢物語』（『北海道大学国語国文研究』五七 昭和五二・二）

吉海直人氏「新古今集の伊勢物語享受」(『日本文学論究』四一 昭和五六・一一)

生澤喜美恵氏「新勅撰集の伊勢物語歌」(『百舌鳥国文』三一 昭和五八・六)

田口尚幸氏「伊勢物語歌の『業平歌らしき』——新古今集・新勅撰集の採歌態度についての考察——」

(『解釈』三六一— 平成二・一)

阿部方行氏「新古今集の伊勢物語歌」(『日本文学』三九・九 平成二・九)

林克則氏「新古今集の撰集と典拠伊勢物語」(『国語と国文学』七七—二 平成一二・二)

拙稿「伊勢物語享受の二側面——新古今集・新勅撰集の伊勢物語歌——」(『国語国文』六九—七 平成一二・七)

#### 〈注〉

(一) 前掲参考文献、吉海直人氏論文。

(二) 「おもふには」の歌については、伊勢物語(六五段)に、思ふには忍ぶることぞ負けにける逢ふにしかへばさもあらばあれ

とあるのに対し、古今集(五〇三)には、

おもふには忍ぶる事ぞまけにける色にはいでじとおもひしものを

とある「よみ人知らず」の歌である。古今六帖(二六八二)にも古今集と同じ形で収録され、延喜御集には、

醍醐のみかど、まだくらみにおはしましける時、御めのとの宣旨君に色ゆるさせたまふとて

思ふにはしのぶることぞまけにける色にはいでじとおもひしものを

とあって、延喜帝の御詠とされている。

「わするらむと」の歌については、伊勢物語(二一段)に、わするらむと思ふ心のうたがひにありしよりけにものかなしき

とあるのに対し、古今集(七一八)には、

忘れなむと思ふ心のつくからに有りしよりけにまづぞこひしき

とある「よみ人知らず」の歌である。

なお、新古今集ではいずれも伊勢物語と一致する形で「題知らず、よみ人知らず」として収録されている。

(三) 前掲参考文献、神谷敏成氏論文。

(四) 前掲参考文献、生澤喜美恵氏論文。

(五) 前掲参考文献、田口尚幸氏論文。

(六) 業平が陸奥の国で小町の髑髏を見つけ、亡骸を弔う話は当時かなり流布していたようで、江家次第・古事談・無名抄などに見ることができる。伊勢物語一一五段に直接結びつくわけではないが、「業平・小町・陸奥の国」が結びつ

きやすい状況にあったことは考えておいてもよいように思う。

（七）前掲参考文献、神谷敏成氏論文・吉海直人氏論文。なお、二六段については神谷氏・吉海氏が、八六段については神谷氏が指摘されている。

（八）それぞれの歌については、前掲注（二）。

（九）「業平」について、大和物語一四三段、一四四段、一六

〇段、一六六段では、すべて「在中将」と記されている。

（一〇）前掲参考文献、神谷敏成氏論文・吉海直人氏論文。

（一一）前掲参考文献、林克則氏論文。

（一二）前掲参考文献、神谷敏成氏論文・生澤喜美恵氏論文。

（一三）前掲参考文献、生澤喜美恵氏論文。

（すずき たかし・研修員）